

# 研究ノート

## 労働者生産組合について

——事例と思想をめぐる若干の考察——

一 はじめに——現実と問題

二 協同組合思想と生産組合

三 産業民主制と民主的企業形態

四 ブリテンにおける問題の实在

五 生産組合の歴史と現状

(1) ブリテンの現場労働者の生産組合 ("cloth cap" coop) (以上  
本号)

(2) ICOM (産業的共同所有権確立運動) と同類の諸協同企業

(3) ウエッジウッド・ベン協同組合

(4) ブリテン生産協同組合のフランス生産協同組合運動との対比的考察

六 モンドラゴン (スペイン・バスク地方) 協同組合企業集団の経験について、その紹介と考察

労働者生産組合について

七 一応の結論

一、はじめに——現実と問題

一体、協同組合論の分野で、もっとも研究の手薄な分野は、労働者生産組合 (協同組合工場・職人の自治生産組合) の分野であり、通例は、理想主義的な抽象論か、マルクス主義の大先達たち、マルクス・エンゲルス・レーニン・ベルンシュタインなどの古典的議論をそのまま現代社会にひき直した、教理問答的な教説のいずれかが殆んどを占めている。では問題がないかというとしてそうではない。何よりも生産組合の評価については、完全に対立した考えかたが存在していて、私たちを困却させる。まずその一方の極にあるものは、生産組合こそ協同組合

岡 野 昇 一

の理想であり、規範であるという考え方である。だが、他面において、実際には生産組合は、現実化がまことに難かしく、実地に存在するものは数少ないということも強調されている。遺稿『協同組合論』で、沢村康教授は、「生産組合は組合員たる労働者を賃銀労働制度の桎梏から解放するという最も遠大なる理想を掲げるものであって、其点に於て、他の一切の協同組合に冠絶する大使命を有するものと云わなければならない。されば Schulze-Deitsch が生産組合を以て協同組合制度の王座に座るべきものと為したのは、蓋し故なきに非ずといふべきである」(二三九ページ)と述べている。しかし、それだけでは生産組合に関する記述は完全でない。国を、また時代を異にするにつれて若干の相違はあるが、生産組合の設立と存続は、困難が多く、失敗もしくは、資本主義企業化するのを普通とし、生産組合として理想的に発展するものはほとんど存在していないとしてよい、とこの間の事情について詳しく述べ、要するに「生産組合は其事業を成功的に経営することは極めて困難であつて多くは設立後間もなく崩壊せざるを得ない」(二四三ページ)のであり、これは「理想に基づいて案出したる精神的産物であるから、之を論述せる文献は甚だ多いけれど、其実際の情景は甚だ乏しいのである」(二三九ページ)<sup>(1)</sup>としている。

かくのごとき、生産組合評価の対立は、理論的には、つぎのごとき対立する二説としてあらわれ、その後の生産組合運動の實際に大きな影響を与えた。

まず、労働者生産組合に対して高い評価を与え、これを理論的に整理して示した代表として、マルクスをとりあげよう。これは、一八六〇年代におけるランカシアやヨークシャの紡績工場、製粉工場、ホーム・コロニーの売店その他における協同組合制度の広範囲の普及を前提にして、協同組合工場の社会的実験の価値を偉大なものと評価し、それがつぎのことを示したと結んだ。「大規模生産、しかも近代科学の進歩にしたがう大規模生産は、労働者を雇傭する主人の階級が存在しなくても遂行できること、そして雇傭労働は、奴隷労働や農奴労働のように、一時的な劣った形式にすぎず、喜んで働く手、はりきつた精神、よろこばしい心情をもつてその労作にはげむ協同労働に面して消滅すべき運命にあること、を示した」<sup>(2)</sup>

ところでマルクスはさらに条件をつけ、協同組合労働が、大衆を解放し、貧困を軽減するためには、それが個々の労働者の偶然的努力の狭い範囲から、国民的規模の協同組合を通ずる、つまり、国家的手段によつて育成さるべきであるとした。要するに、彼は、大規模生産は、労働者の協同労働によつて、それのみによつて可能であるが、それは、国家的手段の育成と、国民的規模の大組織による場合に、大衆の福祉と貧困の軽減の手段として機能するしたのであった。これが、述べられたのは一九世紀六〇年代のことではあるが、大規模生産と、国家乃至国民的規模の自由な協同組合労働、そして自由な協同組合生産を、巨大な調和のとれた社会的生産を支配するものたらしめるため

には、全般的な社会の変化、すなわち社会機構と権力形態の変化、が必要であることを説くのである。これは人類史の転期にあたり、大きな社会のメカニズムの変化こそが人間の発展の方向を、良いそして明るい方向におもむかせる筈だと樂觀的に説いている点で、真実ではあるがやや時代的制約にとらわれた結論のように思われる。協同組合労働の大規模化、国家権力の支援、メカニズムと制度の重視が、くだって今日の世界に何をもたらししているか。社会主義の混迷と、両体制を通じての双方に、官僚制度や大規模管理社会の弊害が日夜進展して、歯止めの見当らぬ状況を見れば、あのマルクスの考え方の中にさえも、未来へのある樂觀、大規模中央集権の理想化、という問題点<sup>(3)</sup>が存在したとしてよいのではあるまいか。

但しこれをベルンシュタインのごとく矮小化してとらえるなら、協同組合の意味を大きく誤まるものといわねばならない。「俗物化」「プチブル化」した消費組合、小生産者の協同組合と、消滅衰弱する生産組合というその観点は、他力本願的、制度依存的ベシミズム以外の何ものでもない。ともかく、たとえばベルンシュタインに代表されるマルクス亜流の見解は、資本主義下の協同組合を、失敗、小会社企業化（生産組合の場合）単なる小売店化（消費組合の場合）の道を辿ると結論づけることによって、協同組合運動の普遍を個別に矮小化したのである。

(1) なおヘルムート・ファウスト 小沢訳『協同組合運動の先駆者たち』には「デリーチュは生産協同組合をもっとも完全なタイプの

#### 労働者生産組合について

協同組合と考えていた」とある（一二二ページ）。

(2) マルクス『国際労働者協会創立宣言』マルエン選集二巻一二一—一二三ページ 全集（邦訳）一六巻九ページ、なお近藤康男『協同組合論』『農業経済研究入門』所収、三二二ページ以後参照。

(3) たとえば、ブーバー『ユートピアへの途』長谷川進訳、理想社刊昭和四七年、八、参照。

一方、生産組合に関する否定評価の代表的存在としてウェッブ夫妻を挙げることに異存はないであろう。その古典的名著『消費組合運動』は、生産組合を「自治工場」として「生産者民主制」の中に包括し、それが、いわゆる排他的傾向の故に、或は利己主義と訓練欠如の故に、失敗もしくは、小資本家組合への変化の傾向を辿ることを結論する。そしてさらに詳しくピアトリス・W夫人の『消費組合発達史論』は、生産組合に関してその一章を献げ、周到な分類と調査の結果として、「自治的協同工場の幻想は霧散して、朦朧たる産業的空影となり終った」（訳本二〇三ページ）とまで極論したのであった。そして生産組合失敗の原因を、資本と販路と組織的訓練の欠如に帰し、多くの場合、「一営利家に代うるに多数の営利家をもつてする産業組織」（二二四ページ）をつくることになり「労働を買う所の資本家であるにせよ、又は資本を買う所の労働者であるにせよ、将又両者の間の共同団体であるにせよ、とにかくすべての生産者の組合は、一般社会の利益と直接利害相反する」（二二五ページ）ものであるとした。以上にみたごとく、協同組合論における

「生産組合」に関する論議は、それが組合の王者であり、完全者であると理想化され規範化されている一方で、現実には、殆んど存在しない組織であると規定する矛盾したものであることを、すなわち失敗するか、または名目のみで内実は、資本家的小会社企業に転化しているとされてきたことを、代表的な説を挙げて明らかにした。

ところで、現今の社会経済情勢は、諸般の事情からして、この生産組合の現実化の必要を自覚し、その方途を模索し始めているのではないかと考えられる。その所以は、先ず体制としての社会主義が、必ずしも人類史における必然的な理想の形態の唯一のものでないことが明らかとなったこと、次に大量生産と現代技術の前途に、必ずしも樂觀が許されなくなり、中間技術乃至最適規模の経済が唱えられはじめたこと。そして最後に、経済体制の相違を超えて、官僚主義の弊害が顕著になったこと、以上三点に求められるであろう。そこで問題をより具体化すると、組織成員の自由かつ個別的な自発性を發揮させる管理方式の効率性と組織成員の自由な参加を、いかにしてバランスよく両立させるかという問題の解決に、生産組合の歴史と現状の検討は、資する点が多いのではないか、というものである。これは、種々の学問分野で、多くの人々によって追求されている問題であるが、例えば農業協同組合の経営内の公正な立場にたつ識者の発言にもこうした期待を見出すことは出来る<sup>(5)</sup>。

(4) E. F. Schumacher, "Small is Beautiful", p. 143 (斉藤訳)

# 『人間復興の経済』一七ページ。

(5) 現在の農協の最大の問題を「理念と現実のかい離」に見出し、「かい離」の実態と問題点を検討し「転換」の方向を明らかにしようとした甲斐武至氏は、解決の視角を原則的には、単位農協が、協同組合の「原点」に立脚した組織活動を主体的に展開することであるとされ、そして「原点」とは、第一に「大衆的民主主義」(真のデモクラシー)第二に「一人は万人のために、万人は一人のために」扶けあう「人道主義」(ヒューマニズム)と、第三「拒絶と抵抗」の反骨精神をあげられる。この点が協同運動の教訓であるところとされるが、生産組合もここに含まれる。そのためには組合員の生産(営農)を促進し生活をまもり、環境を守らなければならない。また経営原則として、組合員の主体的参加、応益負担、損益均衡、人間尊重が挙げられ、以上の骨組に肉をつける形で農協経営の転換が説かれている(『農協経営転換の論理』参照)。

転換の方向の模索が自由な経営組織と大衆参加に置かれていることを、経営の次元から、まことに具体的に指示されていると私には思われる。抽象的な、或いは、社会主義になれば協同組合は成功する、というような仮定的な論議でなく、実情を充分踏まえ、かつプラグマテックな、しかも充分経営学や組織論の学理を踏まえた論説は問題の困難さゆえに、珍重するに足りると思われる。

ところで、曲り角にたつ我国の農業協同組合の前途を、とらわれぬ立場で展望する場合、重要なのは、協同組合労働者の立場に関連する問題である。端的にこれを指摘した一例を挙げ、その問題の所在を指示しよう。

近藤康男教授は、戦後再編された独占体の下部組織の一環として、農協が、農民を収奪するメカニズムを構造的に分析した『統・貧しさからの解放』において、龐大な農協の系統組織の再建とその存続が、独占資本の収奪メカニズムの一環となることの構造的分析を通じて運動の自主性の欠如を批判し、その対策として、農協民主化運動の拠点を下級職員⇨農協組織の運営を支える労働者、の組織的な運動にもとめ、職員組合に民主化の原動力をもとめている。この点は、『協同組合の理論』にさらに展開され、整理された（第一章第六節 農協職員のプロレタリアート化、一六七ページ）。さて、農協の労使関係の特質は、経営内からこれを見れば、若干変化してきているが、その日本の特質たる「年功序列的労使関係」のほかに「経営家族主義」を一般的にそなえる他に「農協」独自の労使関係として、「お役所的」方式の模倣採用、「何でも屋的非専門化体質」「ボス（役員・お偉かた）奉仕優先、組合員二の次型」、「むら社会的まあまあ体質」をもち、農村における協同組合組織への適応性、日本型過剰流動性志向社会への利点と、前近代人間および社会、諸関係の欠点とを併せもっている。このような、職員組合は、一面では、労使の対立という側面をそなえながら、他面では、労使双方が同じ農村内の農民の世帯主とその子弟、として生産者、所有者、生活者を兼ねる社会的資質を共有し、労使協調の側面を色濃くそなえる特質を有する。このような、労働組合が、農協民主化の原点たりうる可能性と条件をどう考えるか、理想と

#### 労働者生産組合について

現実のはざまに存在する難問は、ここでも深刻なものといわなければならない。

ところで、小農による酪農、農産加工の理想的先進国、デンマークの農業協同組合の、比類ない特徴は、個々の農民の自主性と自発性にもとづき、任意（ボランティア）に民主的に、組織され、運営され、発展している点にあるといわれる。国家や政府、その他からの支持、援助、補助金もなく、したがってまた制約、規制、介入をうけることなく、協同組合に関する特別な立法も、法的規定も、したがって規則や監督もなく、普通の民法や商法の範囲内で自主、自発的に隣人との連帯協同の精神にもとづく協同組合組織が、現実には、西欧の一角に存在し、協同組合の制度、組織のあり方、事業のおこない方、経営の管理運営が個々の組合の自由裁量に任されている。そしてこれを前提にして協同組合原則が単なるうたい文句でなく現実<sup>(6)</sup>に機能していることと理想的状況を、単なる夢想とせず一つの目標として実現するためには、協同組合を考察する視点に関する発想の転換が必要なのではあるまいか。組合員の参加意識の稀薄を歎く前に我々は、我国協同組合の当面する問題と現実の関係について、労働者生産組合の歴史と思想を検討の対象とする理由を見出しうる。ここでは何よりも、協同組合の原点、規範の確認が、その目的となるのであり、そこからのみ現実の問題処理にさいしての方向を決定するための大綱をひきだしうるのではあるまいか、これが以下の作業の意味である。

(6) デンマークの農業協同組合については 沢村康『協同組合論』七四七ページ以下、御園喜博『デンマーク』変貌する「乳と蜜の流れ」U・P選書八三ページ以下、Harald Faber, *Co-operation in Danish Agriculture*, 1918, Longmans 参照。

## 二 協同思想と生産組合

まず、ロバート・オーエンのコミュニティの今日的意義について考察してみよう。われわれは一八二一年に完成した『ラナーク州への報告』に彼のコミュニティ論の成熟を見出す。これはまさにいわゆる協同社会主義を概念づけたのであるが、ここで問題とするのは、それが、貧しい労働階級に対する雇用の創出策であり、そのための一社会体制の創出で、それも、「一人も一時的な不都合にあわすことなく、この変革を達成する」(白井厚『オウエン』一〇四ページ) はずのものであった。オーエンは、産業革命の結果人類のつくり出した巨大な生産力と社会的労働の合理的使用によるコミュニティの建設を、企画し、実験した。不幸にも、実験は全き失敗に終ったが、彼の協同思想、社会主義はオーエン主義として、イギリス労働運動、協同組合運動、社会主義に多彩に影響した。オーエンが協同組合の父と呼ばれる所以である。

(7) トーニイは、ロバート・オーエンを、ヘンリー・フォードに擬し、実務的な鋭敏さと政治的な純真さとをあわせもつていたことを指摘している。かれは大工業の幼年期に、そこから生れはじめてい

た社会秩序と、するどく対立する社会秩序の原理を説いた伝道者なのであつたが、同時にこの世の商売の成功者でもあつた。ここからしてその特質は、逆説的な二面性にあることをトーニイは強調する。「理想主義的であると同時に実際的、軽信的であると同時に、抜け目のない、尊大であると同時にしばしばこつけない、気まぐれでしかも不屈さに支えられた人物は、人間は環境の創造物であるという考え方をどこまでも貫こうと苦斗したのであつた。産業革命の結果として生じた高い生産力は、製造業の現在のあり方を変えることによつて、人々の生活様式を都市化と工場制の弊害から救い得るという基本哲学は、すずんだ教育計画と、共同社会コミュニティの結合(あるいは切衷)策として、田園村落の建設による貧困と失業の救済政策に結実した。しかし人々は冷淡であり、より現実的であつた。彼は新世界に、ニューハーモニーの理想をもとめた。」(トーニイ『急進主義の伝統』第一部三人の急進主義者たち、2、ロバートオーエン) しかし働かずに安逸な生活を求める食いつめた人、ならず者、詐欺漢たちが、彼の理想を粉砕した。全村一家族主義と衣食住・教育の同権の原則は高邁にすぎ、生産の軽視と分配の平等は村を財政的に破たんさせた。かれは現実を超越して、理想にはしりがちであつた。彼は新社会の教祖とはなつたが、現実の知識の不足によつて遂に建設者たりえなかつたことをトーニイは指摘している。しかし、かれの「教育と工場立法に関する努力を歴史家たちは死後はるかな時点で正しく認めるにいたつた」(トーニイ『急進主義の伝統』(五三ページ)。要するに彼の理想は、余りに時代に先走つたものであつたというのである。

オーエンについては、白井厚『オウエン』世界思想家全書 牧書

店發行がまことに、みごとに要約されたハンド・ブックとなっている。他に八研究動向Ⅴ「ロバート・オウエンと現代」『社会思想史論集』がオウエンについての簡にして要を得た思想像を与える。その他、五島茂「ロバート・オウエン」家の光協会、も面白い。

オウエンとはば、時を同じうして、フランス資本主義の完成を目指すサン・シモンの影響で近代的な労働者生産組合の思想がフランスにおいて体系化された。フリーエのファランジュ、ビュシエの労働者生産組合の組織構想が、その最初のものとされている。このファランジュは、生産と消費とを共同におこなう地域団体で、消費組合と生産組合を兼ねた協同組織であった。ビュシエは、サン・シモンによりながら社会改良の手段として労働者の生産組合を提唱した。「かれの主張した生産組合は、労働者をもって組織し、その労働者は、労力を提供して共同生産をなし、その生産物を売却して得たる利益は、その八割を組合員に分配し、残金は共同の基金に積立てる。分配は各員の提供したる労働日数に按分して之をおこない、また積立てたる基金はそれを以て逐次組合の設備を充実拡大するに宛てて、やがては労働者を解放するにいたる理想社会を建設せんとしたものである」(二一ページ)との高須虎六氏の『海外産業組合史』の記述は、現に、ビュシエが一八三一年設立したパリの指物師の生産組合や一八三二年の金細工師組合(一八七三年まで存続)で実現したものであった。生産組合における、企業的なミクロの構造がビュシエのものであるとすれば、マクロの体制的構想は、次

#### 労働者生産組合について

いで出現したルイ・ブランの「社会工場」(Ateliers sociaux)であって、「同一職業のものが結合して国家の援助のもとに工場を設立し、共同して経営する」失業労働者救済の組織であった。国家の信用供与を媒介(過渡的に)として、労働者生産組合を基礎とする一種の協同組合社会主義(平「市民革命と協同思想」二五三ページ)を構築しようとするものであった。したがって彼の「社会工場」は、農業と工業の二種を含み、協同農場が、中でも重視された。それは「凡そ五十家族を以って一つの農業的社会工場なる協同農場を組織し、そこには国家が任命した農業技師があつて之を指導する。組合員は起居を共にして共同に働き共同に消費をなすもの」(高須『海外産業組合史』三四ページ)として構想された。しかし一九世紀初頭、生産組合の存在は西欧近代資本主義の発展の段階に相応して可能性にとどまらざるを得なかった。イギリスにおける、キリスト教社会主義者たちの生産組合思想の唱導と実現への努力も、上に述べた条件の制約を逃れることは、できなかった。ジャック・ペイリーの記述を引こう。『自己管理の工場実現の理想を、もっとも強く信奉していた一団の人々は、いわゆる「キリスト教社会主義者」とみずから呼んでいた」J・M・ルッドロウ、フレデリック・モリス、チャールズ・キングスレイ、トーマス・ヒューズ、バンシタート・ニールその他を指導者としていた。彼らはそのまわりに見られる貧乏や、労働搾取にぞっとさせられたのであった。ルッドロウは、労働者自己管理の生産者組合の可能性につ

## 労働者生産組合について

いて、フランスの指導者ルイ・ブランや、ビュシェから影響を受けていた『イギリスの協同組合運動』一〇三ページ、勝部・高橋訳。そしてかれらは最初ロンドンに一八四八年洋服職人組合を十二人の裁縫職人を集めてつくり、以後、引続き合計十七個の生産組合を設立した(沢村、前掲二三四ページ)といわれる。またG・D・H・コールによれば、一八六二年から一八八〇年にかけて、産業および節儉組合法によって登記された生産者協同組合は、百六十三組合に達した(『協同組合運動の一世紀』七〇ページ)のであった。しかし、資金を集める困難、組織の規律維持の困難、経営のまずさと、技術進歩追求の困難は、その多くを失敗に追いこみ、成功したものは小資本家企業として利益を追求する事業体に転じた。かくて前述のビアトリス・ポッターのこの段階の生産者組合に対する悲観的評価が生じたのであった。かの女は、その“Co-operative Movement in Great Britain”久留間訳『消費組合発達史論』の第五章“Association of Producers”「生産組合」において、往時の生産組合について詳論する。以下若干のページをこれにあてよう。

キリスト教社会主義者たちの考え方は、「機械と同じく労働をも亦最廉価の市場に購入し、此等の機械及び人間の活動を操縦整頓し、而して其成果たる利潤を保有する労働者の組合を設けむことを主張する」ものであり、その理想は「労働者同胞の觀念 Conception of workers as brethren」に発し、ルッドロウがパリで心酔した「労働者組合」Association Ouvriers の運

動に淵源する。ビュシェがその主唱者であり彼についてはすでに述べた。その結果一八四九年の秋、J・M・ルッドロウ、モリス、キングスレイ、ニール、ヒュース及びル・シュバリエその他が『労働者組合助長協会』“Society for promoting Working Men's Associations”をつくった。その対象部門は機械化が進んでいなかった部門で、裁縫、製靴、建築、ピアノ製作、活版、鍛冶、パン焼等の職人の組合であった。かれらはすでに述べたビュシェ方式で、生産者の自治組合を形成したわけであるが、内外にわたり問題が生じ、モリスの言によれば、組合は「全く金もうけ主義の競争心」で動かされる状況であった。そこで、組合員にたいする自治権の制限、管理の、設立者たちの選任した支配人への委任、中央委員会と援助委員会の組織と調整、など諸種の改良方式が採用された。しかしキリスト教社会主義者たちの如上の献身にもかかわらず、支配人の追放、収支不足、絶えざる紛争、多少の成功による排他性の増大と小組合の分立等々が生じ、設立者たちの最初の計画や希望に相反して、助長協会によるロンドン及びイングランド南部の運動は、墮落した手工業者の営利事業となり終ったのであった(前掲『史論』一七〇ページ)。

キリスト教社会主義者たちの議会における立法活動を通じて、協同組合の公認と行動範囲の拡張運動が成功をおさめ、その結果は罷業によって所期の目的を納めえなかったイングラント北部地方の、労働者たちの「労働条件を有効に規制する手段



としての組合的工場における自主自備の制度を助長する」ための生産協同組合（一八五一年の機械工合同組合の総会決議の表現、前掲訳、七〇ページ、原書二四ページ）の設立に貢献した。機械工、鉄工、裁縫職人、帽子づくり職人、長靴製作職人の組合が、中部の大都市に発生したが、前と同様の運命を辿った。

このキリスト教社会主義者たちの、生産組合運動は、ランカシアの協同組合運動にも、強い影響を及ぼした。ロッチデール製粉組合 Rochdale Corn Mill（一八五〇年設立、ミッチェル・ヘー、ペンドルトン、パディアム、その他の綿工場の最初の組合規則によってそれは証明される。しかも労働者工場の成功により、いわゆる協同的綿工場（So-called Co-operative cotton factories）は、『労働者株式会社』（Working-Class Limiteds）すなわち一ポンド乃至十ポンドの株式を基礎として作られる株式組織の工業会社 Joint Stock Manufacturing Companies で一人一票主義の投票制度をもつ民主的企業、に転化した。ポッターは、ベンジャミン・ジョーンズの諸論文によりながら、この種の企業の失敗例、存続例に克明にあたり、社会的性格を検証し結局「これらの労働階級の組合は、実行と教訓とによって事実上産業の民主化を促進したのであり」、「伶俐な労働組合員が、株主及び理事として得た、商業上、技術上の知識は……産業の組織化のために大きな価値をもった」（原書二二ページ）として「労働者により設立、管理、所有される株式会社は、労働者階級が製造業を支配し指揮する能力を有することを実証

労働者生産組合について

（原書二三ページ）したのであったと述べている。

（８）パディアム及ペンドルトンの両協同組合について、実際労働している男女により設立所有、管理されていたが、管理と労働および、労働する株主と外部の株主との相克、により失敗したとのジェボンズ教授の評を引いている。またサー・ジェームス・シャトルワースの、一八六三年における「労働者株式会社」への規律と管理組織に関する懸念と「成功したロッチデールのミッチェル・ヘー工場（一八五四年）でも結局は協同組合運動家でなく、むしろ利益の永久配当を望む人々を組合に引きつけたものであった」にすぎぬとしたグリーンウッドの言を引証する。そして同様の成功例たるオルダムのサン工場も当時、労働者にして持分主たるものは少数にすぎず、労働者への利潤配分は廃止もしくは減額の方向にあるとしている。そしてジョーンズによって「労働者は、自己の就業する工場の株を所有せんとするよりも、むしろ配当少くとも他の工場の株主となろうとする。なぜならその方が、自由に、株主の権利をおこない得ると感ずるから」とオルダムの傾向をひき、「労働者は出来るなら資本と労働の分離の安全ならんことを好む」としているのである（原、一三〇ページ、訳、一七九ページ）。なお、ピアトリス・ウェップは協同組合運動家たちを二群にわけ、産業の民主的管理 democratic administration of industry を主張する協同組合運動家の一派を連合派あるいは「連合主義者」Federalist（久留間訳文による）と呼び、それぞれの工場は、その中で労働に従事するものにより支配されるべきで、その利潤はこれらの労働する持分主の間に分配されねばならないと主張する『個人主義者』Individualist と区別している（原書七五ページ注・訳書一〇四ページ）。この区

分の意味は、組合と使用人あるいは労働者との関係を考察するためのものである。組合の労働者の、役員の地位に対する資格制限および、組合の利益を、持分主総体に民主的に配分するか、あるいは組合に働らくもののみに配分を限るか、という点に關し、前者の連合主義派は総体に配分し、使用人は役員たり得ぬとするが、後者はしからずとする。ポッターの生産組合論は、後者の批判に終始するものである。そして生産組合の、不振・消滅の原因もしくは資本家的小企業たとえば労働者株式会社への転化の原因を前述のごとく、資本と労働の分離の完全なことを社会が望むことに帰し、『各人が自己の主人公』たらんことを夢としそれにより生ずる、労働者による管理は、商業上の失敗の有力な一因とした。そして、その原因は、第一に資本の不足、第二には企業規律確立の困難、第三に販路の不足もしくは限定にあるとした。

(沢村前掲、二二九ページ。ポッター同、原、一五〇ページ、訳、二〇六ページ)。

さて、ポッターの生産組合論議をつづけよう。一八五三年から一八六五年までは、キリスト教社会主義者たちと、それに鼓舞された生産組合運動は中だるみとなった。しかし一八六五年から六六年にかけて、いわゆる労働者個人への利益分配を主張する生産組合運動はふたたび活氣を取戻す。すなわち一八六六年の、ブリッグス商会のブリッグス式利潤分配方式が労資共同 Co-partnership を目的に傘下の炭坑に採用され、つづく三年間に十一の企業が之にならった(ポッター前掲書、原、一三五ページ、訳、一八五ページ)。当時、労資の共同事業は、盛んに行われた。

主としてキリスト教社会主義者により創立されたコブデン紡績工場をはじめとして、クロス製造、鍛冶工の組合、さらに裁縫、製靴、指物、その他の手工業においても、相当数の組合が設立され、建築、機械製作の分野にまで及んだ。そして一八七〇年より七四年にいたる五年間、機械、鉄工、炭坑労働者などが、ノーザムバーランド、ダラム、ヨークシャ、スコットランド各地で、生産協同組合、労働者工場の企てをおこし、著るしい努力がおこなわれたにも拘わらず、いずも失敗に終った。労働組合は約六万ポンドを損失し、大労働組合の『組合』工場 associated workshops 嫌悪症をひきおこした。やうに、イングリッシュ卸売組合 (English co-operative Wholesale Society) 及び、北部地方の消費組合、スコットランド卸売組合 (S. C. W. S.) も、大きな欠損をひき起し、高価な経験を積んだ(ポッター、前掲、原、一三七ページ、訳、一八八ページ)。ポッターは次のごとく結論してその敘述を終る。「株式会社法又は産業節儉組合法に準拠して登記され、または一八七〇年前にその存在を知られている数百の生産組合のなかで現に残存するものは、僅かに三つである。一八六〇年設立の、エクレス Eccles 製造組合、一八六二年設立のペーズレー Padesley 製造組合および一八六九年設立のマンチエスター印刷組合がこれである」と。

以上で、彼女は、第一部の生産組合の歴史を終り、第二部で、『消費組合発達史論』刊行当時の生産組合の状況を検分する。さて一八九〇年の協同生産組合の中から、卸売組合生産

部、製粉、パン製造組合及び産業及び節儉組合法に登録されているも、労働者に利益と管理を分たぬ事実上の株式会社となっている組合を除外し、四五万五七七ポンドの年売上高を有する七十四の製造組合及び五農業組合を残し、更に活動を中止している睡眠組合二十を除く。そして五十四個の生産組合を次の四種の類型に分つ。

第一種、キリスト教社会主義者のモデル通りで、組合員の間で管理委員会を選定し組合員のみ雇傭する労働者の組合……八組合。

第二種、第一と同性質であるが、申合せにより、又は事実上、終身の組合長又は委員をいただく組合……四組合。

但し存在の明らかなるも詳細不明、二組合。

第三種、自治は行っているが、組合員外の、労働者を雇傭する事実上の小事業主組合、……二十一組合。

第四種、外部の持分主と消費組合とが、資本の大半を供給しているが、組合内の労働者に、持分の所有を奨励、強制し、ただし管理委員会の一員となる資格を与えない組合。

………十二組合

(一組合は名前だけ)。

第五種、農業組合、省略。

例外として次の二種が分類の末尾に付け加えられている。すなわち、産業及節儉組合であつて事実上株式会社となっているもの六組合、分類中に入れられぬ組合、五組合。

労働者生産組合について

第一種は、労働者連帯の理想に立つが、多くは創立後間もなくであり、紛擾をまぬかえず、いずれも小規模で、しかも組合員が、他の労働者を使用する小親方(職場主)である可能性がある。

第二種は、第一種に準じこれに近い組合か、経営者の終身、もしくは地位の長期間の安定に特色がある。この二種類は、労働者生産組合として考えてよいであろう、但し小規模であるかもしくは、規模中位にして内紛と失敗に富むものといえる。要するに生産組合のおかれた環境が、厳しいものであったことを示している。

さて第三種は、協同組合生産連盟傘下の生産組合の過半を占めるが、不幸にしてその内容は、概ね、非組合員の労働より利潤を吸取る小親方の企業組合であることが、内容の調査の結果示されている。その一組合のみは第二種に近づく傾向を示し、労働者の待遇と地位の保身ないし向上に意欲を示すが、ほとんどは、羊の皮を被る狼であるとポッターは批判し、不幸にしてこの種の生産組合が、他よりも生気に富むと遺憾の意を文章表現の上にあらわしている。

次に第四種の組合は、その制度と管理の根本に「純乎たる博愛の精神」がある(原、一四四ページ、訳、一九九ページ)と称揚され、利益分配制を伴っているこの資本家的企業十三組合は、規模が比較的(一―三種に比して、ではあるが)大きく、民主的な消費組合もしくは個人資本家の所有管理のもとにあるが、労働

者は持分主となるべく奨励され、強制される。にもかかわらず組合内にあるかぎり労働者は理事、役員たり得ず、経営権は非労働者の側にある特色を有する。この種の組合がもつとも各種類中活気を呈し、継続年数も総売上高も資本総額も大である。

以上の観察と分析の結果として、ポッターは、「キリスト教社会主義者により提唱され、一部分『ロッチデール開拓者』によって採用され、そして個人主義協同組合主義者により絶えず……勸説された理想、労働者協同の美しい幻想、あるいは『支配人および委員会は、組合員によって、彼等自身の間より選ばれるべき』、自治的協同的工場の幻想、fair vision of a self-governing Co-operative work-shopは霧散して……拡大鏡を用いるとますます知覚し得なくなるボンヤリした産業的な影像となり終った」と述べたのであった(原、一四七ページ・訳二〇三ページ一部変更)。しかも組合の多くの細部を点検するなら、「いわゆる労働者の組合 so-called associations of workers は絶えず変じて、親方の組合 Associations of small masters 實際上、苦汗制度 Sweating system に近似する産業組織、となつている」(原、一四八ページ、訳二〇五ページ)のである。そして、又、労働者の組合と称しながら、其組合員はむしろ私的商業の確実性を選択し、自己の協同的工場を棄ててこれを外部の労働者を雇うことに専ら頼るなど、雇主として組合の提供する利益に冷淡かつ懐疑的態度をとるものを発見する。あるいは、熱心と成功で発足しながら二年を出でずして、自ら好んで独裁

者 dictator にひれふす例や、設立者が自己の地位を終身支配人として確保するとき先見の明を見るのである。かくして、これら五十四の組合のうち労働者生産組合の内容をそなえるものは僅か八組合、それも創立間もないか、長期継続するものは、組合員が、自己の家庭内で就業する熟練手工業者の組合であり、外部の持分主の経営権の下にあるものに過ぎない。かく客観的かつ具体的に生産組合の苦難、失敗、墮落を述べ、その経営的失敗の原因を探つて、ポッターはこれを三に分つ。第一は、資本の欠乏であった。多数の組合が創業資金の不足に悩み、その結果、原料の購入に際し、機械の設置にさいし、工場の立地に際して、また取引上、原料面、生産要具それぞれにおいてさらに、製品の積出にさいして困難におちいった。そしてしばしば高金利の犠牲が、労働者に低賃銀と長時間労働として転嫁された。しかも、この困難に、組合が屈しなかった場合、組合は、小親方の組合となつたのであり、この場合『利潤の分配』は、実は、正味の賃銀の低減、又は品質の劣悪の、隠蔽の手段に他ならなかったのである(原、一五一ページ、訳二〇八ページ参照)。

つぎに販路の不足、これは、組合を作る熟練機械工又は手工業者の、商事に関する無知より生ずる。賃銀の低落の阻止、又は失業者に仕事を供給せんが為につくられる組合は、競争市場に概ね適応することが出来ない、と彼女は主張する。

最後に、経営組織としての規律、訓練の欠如が、特有の欠陥

として最大の失敗の原因として強調される。労働者の管理委員により選出された支配人や監督者は、作業中は労働者を指揮し監督するが、理事会もしくは管理委員会にあつては、その立場が逆転する。要するに、「経営上の政策又は管理上の規律のあらゆる行為が、理事又は選挙権者たる賃労働者の個人的利益に照して論議批評される……」(ことき)管理形式は非常に複雑な組織の産業に適用不可能」(原、一五三ページ、訳、二二二ページ)なのである。従つて、この種組合は遺棄して労働者持分主よりその財産所有主としての権利を奪ひ、かれらの就業している組合の管理に積極的に参加する権利を奪うか、あるいは、協同的工場變じて全き株式会社とならざるを得ないのである(原、一五三ページ、訳書二二二ページ参照)。

結局、ポッターは、生産組合の歴史と現在の混乱は、「一営利家に代えるのに多数の営利家をもつてする産業組織をもつてする」(二四四ページ、原、一五五ページ)案を理想的な経済の合理化の筋道とした人たちの誤りによつて生じたものであるとする。そして、労働者への利益配分制度は、出来高払賃銀の一変態にすぎず、労働組合に対抗する経営者の一方策にすぎないとして、労働組合の賃率制、スライディングスケールシステムによる労働者の「標準賃銀」制を支援するのである。

ポッターは、「産業革命によつて招来された根本的变化、大資本の使用より生ずる生産の増進、工場制度の緻密な規律、自由競争下の専門的経営知識の必要」(原、一六七ページ、訳、二三

#### 労働者生産組合について

一ページ)を強調し巨大資本、科学知識の集約化、機械と遠隔地市場間の投機などが、労働者の勤勉の増加による、資本、規律、商業的知識の不足を補ひ得る領域を日々縮小したことを述べ、労働者は個人として失つたものを集合的に、すなわち、労働組合、消費組合、卸売組合のそれぞれの組合員として、その集团的機構の代表者を通ずる組織的行動によつて、取りかえすべきであるとするのである。個別的経営参加による、労働の集約化と経営の民主化を兼ねそなえた生産組合によつてではなく、団体、組織、自治体、国家などの市民として、労働者の将来の道は、その媒介者、代表者を通じて開かれ得るというのが、ポッターならびに、シドニー・ウェッブの見解であり、この点はその多くの著書を通じて明らかである。

### 三 産業民主制と民主的企業形態

前節に述べたビアトリクス・ウェッブの生産組合論の根柢にあるものは、産業民主制というウェッブ夫妻の考え方である。すなわち労働者は、個人として失つたところを、集合的に、ということは市場の状況にあかろく、雇主の連合組織にたいし一歩も退かず平和的に折衝する外交手腕と、労働者全体がたくましくして信頼をおのずからよせる、統御の才能とを備える、才質すぐれ老練な役員を、擁する労働組合組織の団体交渉によらねばならぬという民主的社會の市民としての労働者のあり方、すなわち消費者主權の思想が彼女の生産組合批判の根柢に存す

## 労働者生産組合について

二〇八

る。そして本質的にはこの評価は、民主的形態の、すなわち独立の、民主的に所有され管理される諸企業の冷遇と酷評の大宗となり多くの追隨者を生じた。

(9) 生産者民主制は、総ての経験が示すごとく……いままで生産の要具を獲得し組織しようと務める時いつでもきまって一律に失敗してきた……。そしてこの様な事業が企業経営として失敗しなかった相対的に僅かな例の場合は、民主制は、自らの仕事を支配する、生産者の民主制でなくなり、事実土資本家の組合となつてしまひ……組織外の労働者を、賃銀を払って雇用することにより、自らの利益をはかる営みをおこなうようになった。ウェップ夫妻『大英社会主義国の構成』第二篇、明日の協同民主国「生産者民主制」(邦訳三九四ページ以下)の項参照、傍点部分がウェップ夫妻の産業民主制なのである。

ところでイギリスの社会主義思潮は、一九二〇年代にいたつて大きな変化を生じた。その転機となつたのは一九一八年の労働党の議会制民主主義政党としての確立である。これよりさき、一九〇〇年、イギリス労働組合会議(LO)の政治委員会として機能していた労働党は社会主義政党として確立した。これがイギリス社会主義思想の世代交代を促がし、ウェップやバーナード・ショウなどの、国家の経済的干渉を正当化する積極国家観や産業国有化政策における官僚的規制を容認する考え方が批判されるにいたつた。ラスキ、コール、トニーイ等の、より大衆民主主義の立場に立つ社会主義が抬頭した。かれらは、機

構的、官僚的、集権的社会主義にたいして、民主主義的な批判、すなわち巨大化する、国家の専制に対する個人の自由の擁護を強く主張する。そして労働組合会議や労働党などの、産業国有化による社会主義建設に、同じく議会民主主義肯定の立場に立ちながら、現場の労働者の自主性や人間性の尊重を強調するのである。たとえ主要産業を国有化し、それがガラス張りの中で経営されるとしても、能率や合理性の貫徹と巨視的な政策の効率的実施により、却つて、人間としての労働者の部品化や官僚機構による市民の疎外が一般化し、自由は、機構や官僚、専門家の自由になるのではないか、強大な国家権力に対して個人の自由をいかにして守り通すか、これが、権力獲得後の労働党や社会主義の課題であると主張した。かくして一九二〇年代、イギリス社会主義の潮流は大きく変化したのである。

そこで当然、産業民主制の概念に、多様な解釈が許されるようになった。むしろウェップ夫妻の産業民主制概念が、一般的なものから特殊なものに変化したとする方が理解し易い。種々の社会構造の理解や社会主義概念の変化に応じて、それは生じたのであつた。従つて産業民主制なる概念の内容は現在多義である。この概念は混乱し模稜としている。そこで、この概念が、過去、現在を通じ使用されてきた多様な方式を整理し、「活動している産業民主制」の諸例とされる産業組織の種類を展開し解析する必要がある。ところで、連合王国・フランス・イタリア・スペインのバスク地方の「労働者生産組合の実際」を論

述したロバート・オークショットは、産業民主制の概念に関する混乱の源泉は四つあるとしこれを次の様に纏めている。同書については後にも詳しく触れるが、とりあえずこれらを列挙し簡単な説明を加えて考察の手掛りとしよう。

(一)二つのサイド、特にこの両側面が通例反目しているような、本質的に二重の組織に適合可能な「民主制」の形態を案出することが論理的に困難であるということから生ずる混乱。

(二)労働者階級の組織（労働組合のごとき）により所有され支配されている企業や、労働者階級が「指導的役割」を果している国々で活動している企業が、それらの諸理由によって、産業民主制の例証と考えられている故の混乱。

(三)管理と窮極の支配（コントロール）の間の区別が屢々実際については、境界線を引くことが難しいということ及び「経営管理の欠如する企業」の可能性に関するユートピア的夢想の故に生ずる混乱。もちろん我々の身近の経営の業務は、民主的に管理される企業においてもその存続に不可欠のものなのであることはいうまでもない。

(四)ほとんどの国で、そして我々に既知の法律制度において、所有権と窮極の支配権が、同一視される故に生ずる混乱。

まず(一)については、唯一のもつとも重要な混乱の源泉であるとし、民主制の本質に触れる問題であるとしている。すなわち、民主制の本質は著者によれば、「正確にその構成員のすべてが、指導者の選択のような、決定的なことからについて、同

一の立場に立つこと」なのであり、もしある企業が必然的に二つの要素からなり二側面を有するなら、二つのサイドへの分割をとりのぞかなければ、民主制という条件に合致しえない。勿論、形式上、たとえば、相対的な両側面の力関係を平等にしたリ、二重の支配体制を公式に認めるのは自由であるが、論理的には全く別のことがらである、と著者は主張する。そこでたとえば、産業関係論のヒュー・クレッグ Hugh Clegg 教授の「二つのサイドの存在こそ、民主主義の特質である」とか、これに左袒するアメリカの産業社会学者ポール・ブラムベルクの「現在の産業組織のもつとも重要な特徴は、労働組合が、経営や資本の権力の専断に対抗して、そなえる防護壁（シールド）にある」のごとき説は結局以下に帰着する。すなわち「本質的には、二重のシステム、二つの側面をもつ組織をいかにして民主化するかというこみいった問題を、困難が実際には存在していないかのごとく取扱うことによって処理するものである」ことである。ブロック多数派提案、西ドイツの意志決定のごときは、二側面の立場の形式的な平等化による二重の産業管理構造の公式化にすぎず、問題の見送りにすぎないわけである。

次に(二)は、ウェッブ夫妻までさかのぼる産業民主制の使用法であり、何らかの意味で、「労働者階級」の施設もしくは企業に適用される場合を含むほか、公共的所有の急進的実現、労働者による企業管理あるいは、「労働者階級に指導的役割を与えよ」という請求など経済の私的市場的領域の駆逐、その他の要

求と同義とされる。さらにこの使用法の特殊例として、「混合経済においては、労働者階級の組織により所有もしくは支配される何らかの企業は『産業民主制』の一例と形容されうる」とのたとえばイスラエルもしくは西ドイツの労組所有企業や、西ドイツの「公益」企業、CWS傘下の生産諸部門たる連合ビール醸造、労働者クラブ所有の醸造所その他が存在する。しかしこの分類に問題がないわけではない。事業部門内部の労働者が支配権をもつのか、あるいは、全体として労働者階級により、その利益のために運営されるものか、「労働者階級の企業」は、「人民の企業」でありそれは、「民主的企業」でもあるという同一視は、労働者階級の組織により所有される企業が、その他の企業より多少とも民主主義的である理由が必ずしも見当らぬことにより、論理の一人歩きにすぎぬとされる。むしろ、産業全般に個々に民主的管理組織が導入され、実際に全経済におよぶなら、労働者管理が達成されるにいたるであろう、ということなのであると著者は説いている。

さてつぎに、真実の概念理解の混乱の源泉として、経営と責任、支配の問題と、所有と参加の問題があげられる。日常的管理と窮極の責任と支配の区別をいかに定義づけるべきかという最初の問題は、完全な自主管理とはすなわち管理組織の欠如であり、経営の諸機能なしですませることであるというユートピア的な考え方が絡まって現実的に解決さるべき難問を形成する。これは企業が実際にリアルに対処すべき問題としている。

最後に、企業の実管理と所有の関係である。さきにのべたように、之は、産業民主制に関する理論的討議における主要な混乱の真実の原因の第二のものである。もし、民主的企業もしくは社会組織(コミュニティ)の本質が、その成員すべてが同一の足場に立つことであるということなら、その原則を所有権に適用するためには、いかなる組織が考え出されうるか、すなわち私たちは企業は民主的に所有され得るかという難問に帰する。管理が労働にもとづくか、所有権にもとづくかという、ヤロスラフ・ペナク教授の分類にしたがうと、世界の企業は体制の如何、地域の別にかかわらず、後者が、ほとんどを占める。もちろん、企業の管理が、所有権にもとづくものにとどまっているところでも、組織を案出して、窮極的には労働側の支配を保証するような方法で、所有権を労働者成員のコントロールのもとにおくようにすることは不可能ではない。しかしこの場合、企業を、労働する人々によって管理するときシステムを考える方が単純であるし、それは資本家の所有が排除されているユーゴスラヴィアのごとき事態にも適応しうる長所をもつ。ところで管理が、労働にもとづくこととなるなら、所有権の問題は副次的性格をもつにいたり、それに代りうる方策は、広い範囲から、種々選択されうるであろう。それには参加者の自己買戻し *by themselves in* 分配利潤の個人的および法律的制限、清算のさいの私有割当制限その他があるか、いずれにせよ労働にもとづく支配と、それに相反する支配への近接の間に生ずる困



難と混乱の回避が重要な問題となる。

ところで、かくのごとき産業民主制概念に関する多種多様な混乱に照応して、それぞれに、擁護する味方の多い、いろいろなモデルが存在する。

そして、ここに政治学的な権力構造の論点をもちこむとどうなるであろうか。この場合「下から上への権力機構が通例、民主的とされる」政治学の本来の対象たる国家から、それに対立する企業に転用される場合、権力の上から下へのシステムにたいしても、民主的という記述が、あまり顧慮せずに適用されているようである。イスラエルの「イスタダルト」(Histadrut)、西ドイツの「公共企業」(communal enterprise)、東欧諸国の「人民の企業」等の、労働者階級や労働者階級の組織体により、所有もしくは管理される、権力は上から下へ向う諸企業類型にあっても、それが、労働者階級の組織であるが故に、民主的と記述されうるのである。またブリテンの場合、ヒュー・クレッグ教授によれば、経営が強力な労働組合の反対に直面する事実によって、権力の上下関係とは別個の産業民主制の第二の特殊な型が存在する。すなわち一組の強力な労働組合が、大きな私企業もしくは公企業において経営に対抗して形成するなんらかの組織は、産業民主制の恐らく真実にして唯一の変種であるわけである。これはブロック多数派提案もしくは意志の共同決定型モデルなのであり、労働組合のえらんだ経営委員会被働者代表が、そこで、底辺からの権力の、上方への移動を構成し

てゆくことができれば、伝統的な上から下への企業構造は、その限りにおいて変容したことになるわけである。そのかぎり、このモデルは両義的又は共同決定的タイプとするのがもっとも常識的で、要するに、一部は上から下に、一部は下から上への企業組織の構造が、この特殊な共同決定的性格の故に、民主的と記述されるものである。

最後に、もっとも重要な、真実の種類、下から上へ意志決定のおこなわれる民主的な産業的企業を考察する。この場合の困難な係争点は経営と資本に関して生ずる。まず経営管理の側面をとり上げよう。このモデルの場合には、企業の窮極の管理と責任は、下から上への権力から生ずる。労働者の全員集会が最終的主権団体となろう。だが日常の経営遂行のため、組織的な協議体が必要となり、集会は選出された委員又は委員会に権限を委任するであろう。もちろん組合又は企業により名称は区々であり、代表的および経営的な両者の権限の境界と二者の現実の関係は変動するであろう。しかし一般にそこから二つの論点を挙示しうるのである。第一に、経営チームは常に組織上、選出団体に従属し、何よりも、選出母胎により定められもしくは許される政策を実施すること、第二に、しかし、企業が近代の経済的競争の世界で成功するためには、経営チームは、在来の企業で経営者が享受しているのと同じ自由を、是認された経営政策の実施に関して必要とすること、以上二点である。ただ以上の一般論は、その純粋型に妥当するのであり、実際には数

多くのこの純粹型からの背離が存在する。その所以は、先ず第一に、この種の企業の出自如何、すなわち、在来の私的資本家の会社からの発足、その民主的転換によるものでベユリイのカフェ食品・菓子組合やノーザムプタンのスコットペーダー・カモンウェルズの場合には、経営チームは完全には、労働者の全員集会もしくはその選挙された代表たちの、いずれにも従属する存在ではなかった。経営は特定の自己防衛的方式をもち、労働者たちもしばらくの間、変革しえなかった。つぎに、窮極の支配権をもつ労働者たちの集会の投票に比重の付される場合がある。賃銀の水準に應ずる比重(初期のモンドラゴン)、投票制度にウェイトをつけるヴァレンシアの都市交通企業、ただし、支配が労働にリンクする企業の場合には民主的組織の進展につれて、一人一票への変化が強制されてゆく公算が必須であり、スペイン・バスク地方のモンドラゴン協同組合グループで、それは現実に生じたのであった。

(10) 『人間復興の経済』シュエマツハー、二〇八ページ以降、所有権の新形態参照。後に触れる。

つぎに管理が、資本あるいは持分によっておこなわれる場合には、純粹の下意上通の、つまり民主的企業からの重要な偏差が生ずる。労働しない人々、たとえば年金を得る退役労働者や、友好的労働組合員、その支持者たちが、主権をもつ集会の成員として許容されうる場合がある。或は全く反対に、労働者のあるものが排除されてしまう場合もある。試用期間の newcomer

の一次的排除でなく、多少とも永久的な主権からの排除がそれである。組合もしくは企業の管理が資本(持分)に関連し、労働につながっていない場合には、如上のいずれかの場合が生じがちであった。たとえばロッチデール開拓者に起源をもつ生産組合においても、持分への所有権が、主権をもつ集会における投票権を定めたので、たとえ投票権を、持分に関係なく一票に制限しても、その原則は、非労働者を持分所有者から排除せず、労働者は総て持分をもつべきであるとする主張とはならなかった。ロッチデール織物協同組合の資本家企業への転身はその結果として生じたのである。ブリテンの二、三の産業的労働者生産組合および多数のフランスの生産組合はロッチデール原則の翻案にもとづいて活動し、したがって、外部や内部からの侵略の危険にさらされた。非労働者の、組合内発言権の増大は外部資本の支配を許し、労働者のなかに、持分を所有するものと、持分のない選挙権をもたぬ組合員をつくる可能性を生じさせ、いずれにせよ、資本家的企業への転化を、一は外部から、一は内部から、許すにいたるのである。前述した、ウェップ夫妻の生産協同組合にたいする強い反対は、これらに向けられた。しかしこの墮落傾向は、二つの、単純な規則の変更によって構造的に避けられうるものであったとされる。

ところで、労働者たちに支配された、民主的企業にとっては、資本と所有の代替的配列としては、いかなる選択が可能であろうか、これが残された重要な問題である。労働に支配される企

業は、いかなる資本と所有の構造を選択しうるであろうか。束縛は、内部資本の必要と外部の資本は機能を許されても管理を許されぬ点に存する。選択の範囲は本質的には広い。一極には、集産的かつ非分割的なまとまった資本があり、他端には、十分に分割され個別的に所有される資本が存する。前者は、ユーゴスラヴィアの社会的に所有される資本、さらに、ビュリイキャフェやスコットベードラーの集産的な、「労働者の協同組織体 (Working Community)」をはじめ、ブリテンのマイケルジョーンズ、ノーザムプタン宝石加工職人組合、二つのウェルジウッド・ベン協同組合等が属する。個別的に所有される資本の方式の側には、ハンチンドン近傍で、職人の一団を賃貸するランズマンの協同所有組合があり、まさに、「働くものの資本主義」や「小粒の資本主義」と形容するに相応しい組織である。ただしこの場合、個人の、突然の資本引上げを、妨げる規約と、合名会社のモデルを有利とする強い理論的主張が必要となる。これらの両極的な資本所有形態の間に、組合構成資本の区分が広範囲に横たわるとしてよいであろう。またフランスやスペインのごとく効率的な組合せを法的に規定する場合もある。

最後に、資本所有に関して追加さるべき問題がある。第一は、利潤の分配が、所有の構造と必ずしも照応しないことであり、第二には、内部資本が集産的にあるいは一部、集团的に所有される際には、清算にさいして、個別に配分しつくす解体的配当が許されない場合が、法もしくは定款によって定められて

#### 労働者生産組合について

いる場合のあることである。そして第三には加入金や個別持分保有のパーセンテージの諸問題に関し特殊な規定や制度が多く存在する。以上類型論的に、産業民主制の概念規定とそれに応ずる諸形態を考察した。だが類型論は、所詮、部分的、特殊的な抽象論にすぎない。より具体的な、新たな企業形態としての生産協同組合像はいかなるものであろうか。そして一時ウェッブ夫妻によって廃棄されかけた生産組合に何故に復活の気運が生じたのであろうか。問題を現実の場に移そう。

#### 四 ブリテンにおける問題の实在

かれ自身、四年間イングランド北部で、一般大衆と生活し活動した現場の経験を踏まえて、ロバート・オークショットは『労働者生産組合の実情』(一九七八年、ポール・ラトレッジ&キーン社刊、ロンドン)を著作した。かれは、多くの人びと特に若者の間の在来企業の組織(公有、私有を問わず)に対する不満感に応えるために書いたとしているが、かれは、それによって、一般的には産業民主制 特殊的にはいわゆる「イギリス病」に関する教訓を求めるのである。そして労働者の生産組合とその成功のための要因に辿りつくのである。

(11) 内藤則邦教授の『イギリスの労働者階級 昭和五〇年・東洋経済新報社刊、そのとくに第一章参照、なお森嶋通夫『イギリスと日本』『続イギリスと日本』参着のこと。メタルの両面を慎重にまず認識することが、この複雑な問題を考察するために必要だが、この

両著者は興味深く構造的に我々を啓発する。

ところで、この著者はいわゆる「英国病」をどうみているか。彼は病因をイギリス製造業における現場と経営の激しい対立の結果として生ずる低い生産性に見ているのである。そして著者は、つぎのことを説得的に展開する。すなわち、バスク地方のモンドラゴンを中心とする生産を主とする組合の、驚異的な成功をおさめた諸グループを別とすると、真の労働者生産組合は、稀にしか形成されなかったのだと。その主な経験は、協同的な企業というより、むしろ一方では、労働者たちの企業であるか、他方では、慈悲的な中産階級の資本家たちによる、通例上からつくられ始め下におよぶ、理想主義的な high minded 共同所有企業であるかの、いずれかから成っていた。この書は両タイプがともに大きな欠点に苦しんでいたことを示す。第一のものは、通例、経営に弱く、不当な、資本の投入引上げに災いされた。他方、第二のタイプは、しばしば、現場の積極的な反応(レスポンス)を得ることが出来なかった。どちらの場合も採用された構成(ストラクチャ)は一般に混乱しており、しばしば企業の到達すべき目標に相反するものであった。

著者は、一方で過去の誤ちを繰返すべきでないことを強調しつつ、にも拘わらず、これらの欠陥の多い協同組合記述でさえ、広く想像されているよりも、佻しいものではないと指摘する。モンドラゴンの協組運動を述べて、オークショットは、かれらが正しい構成を選び、適当な経営と金融に恵まれるならば、労

働者の生産組合が、いかなることを成就しうるかの、素晴らしい活気にみちた一例を供することを確信にみちて示すのである。要するにかれは、現今の産業世界におけるジェファーソンのなデモクラシーのレブリカ(複製品)を供してみせたのであり、またかれらの成功における決定的な諸要因の一つが、個別的な生産者の所有権なる要素であり、つまり労働者階級の伝統の連帯責任の諸価値と、自由と個人主義の伝統の独立所有者の自らを恃む諸価値との、賢明なブレンド(混合物)こそが、その要素であることを示してみせるのである。

さて、著者の念頭におく実際問題は、既に述べたごとくいわゆる『英国病』である。彼の簡潔な説明(一〇ページ以降)によるとそれは「産業および全般的な経済活動の相対的な衰退」であり「主な競争相手国に比較しての、与えられた労働時間当り生産量の単純な減退」である。ベッカーマン教授の、西欧の休日分布に関する討論における語を借りるなら「ブリテンの休日は、いずれよりも少く短時間である。我々はまさに、仕事中に休みをとる選択をおこなっているのだ」ということになる。それはブリテンの自動車産業の、大陸比、二分の一の生産性にあらわれ、主要工場地帯の、労働者たちの、有給労働の僅か三〇%の実働率に示されている。さらにイギリスの鉄道とほぼ同じ貨物輸送量、延長マイル数、輸送旅客数の、合衆国のイリノイ湾岸中央鉄道との比較において、従業員が十分の一という衝撃的なデータに現象する。さらに国全体の産業活動について

も、労働生産性の差違による生産力格差の存在は、諸種の資料によって証拠づけられている。

要するに、貧弱な連合王国の（産業）活動のあきらかな根拠として、国の労働者たちの相対的に貧しい生産性が問題とされる所以が存在するのである。この低労働生産性は、「英国病」の徴候にとり、むしろ、ためらわぬ「争議行為」起動の性向より大きな意味をもつ。民間機械工業に関する、経済開発庁EDC報告が明らかにしたことく、「機械工業労働者たちが、労働日の第一時間目にさいし、自室 Cabin から出かけずに、お茶をのみ世話をしサン写真新聞を読むのだと主張して、事実上、就業開始を拒否しても、それはストライキに公式には分類されないであろうが、ズバリ低い生産性の徴候ではないだろうか。この種の行為の時間を重ねた累積効果は、生産量や費用に破壊的に影響するであろうし、その破壊効果は、公式統計が罷業と呼ぶ少数の鋭い散発行為にくらべて、ずっと甚だしいであろう」。さらに、同じ報告は、「経営管理層と現場との関係、がすぐれて全般的な崩壊関係にある」ことをつけ加えている。そして著者は、自らの経験（後述するサンダーランドディアの協同企業の経験）にたつて、この管理と経営の断絶をいわゆる「英国病」の他の主要な発露とする。著者自身の失敗の経験にたつその表現は、痛烈かつ哀切である。「それはほとんど耐えることのできぬ争い、疑い、不信の雰囲気を感じさせるものであり、……この中間領域或は界面をめぐる不信と疑惑は、少くとも植民地時代後

#### 労働者生産組合について

のアフリカの、白人と黒人の間のそれと同じ位強力であることを私は発見した。また私は、偶然イングランド北部の建築労働者の大多数が、その仕事をうまく完成させるよりも、課せられた仕事を忌避することにより多くの喜びを見出しているように思われることを知った」と。そして彼は、次のように結論する。「もし私が正しいとするなら、いわゆる『英国病』はこの場合おもに非帯に低い労働生産性と、管理と労働二グループの直接に接触する『中間領域』における現場と管理者層のすぐれて貧しい人間関係によって特色づけられるのである」と。ところで、かくのごとき「英国病」の対策は、強い経営と強力な政府の平手打のみであると論ずるものもあるが、著者は、これに對蹠的に、誤っているのは、経営の構造 structure にほかならないと主張する。すなわち現存の経営構造こそ、産業のこの二側面を愚かな争いの中にとじこめ、そして労働者の大多数に対する、労働の適切な動機づけ、もしくは企業の連帯の動機づけを用意することに失敗したのである、と。現在の企業構造の主要な欠陥を以上のごとく解析した著者は、そこでこれと異なる経営構造をもつ、欠陥を矯正する組織として生産組合をとりあげ、その歴史と現状を考察するのである。

(12) やや詳しくR・オークショットの論旨を要約しておこう。資本と労働のあいだの関係を新しい基礎に置こうとして、調和、協同、改善された経営、生産にたいする積極的な現場の態度などの美事な進行により、ブリテンの産業の社会関係を、スエーデンや西ドイツ

のそれと類似させる筈の、より基本的にはそれがなされるのみで、従来の構造的利害対立たる資本と労働の階級対立が超越されるであろうと信じられた、E・C的な協同の意志決定を目指すブロック多数派報告は、ブリテンの産業構造の重大な問題点を解決し、果してイギリス病の解決に効果を及ぼしうるか、之が著者の本書の冒頭に設定する問題であり、著者は、それに否定的に解答する。

かれは先ず、直覺的もしくは本質的な感觸をのべる。その四年間の、一般大衆との生活と労働の経験、古来の産業地帯たるイギリス北部でもにした経験によって、生産と利潤に対する現場の態度は、労働組合のえらんだ被働者の代表が、かりに会社の重役会で株主の代表と対面して坐る制度を導入することがあっても、いささかなりとも、変化するであろうとは信じられないとする。

次に、初期の産業史からの類推は、この本能的感觸を力づける。たとえば、初期の産業改革者の世代たるウェップ夫妻やハーバート・モリソンは、国有化によって、現場が積極的になると信じさせたのでなかったのか。しかもブロック多数派報告との発想の類似に注目すると、このことは国有化、労働者重役のいずれの手段も、労働者および労働組合の混合経済と市場機構に対する敵意の放棄にとつて有効である、とは信じられないとする。このような、労働者の経済的利益の変動を随伴せずにおこなわれる公的な制度の変化が、果して仕事への現場の態度を改善すると信じうるであろうかと疑問を提起しているのである。

終りに、企業と生産者グループの運営が成功するための社会経済的条件を考察する。すなわち個人の技術と技術の水準に、企業の成功が左右されるのは勿論であるが、それはチームワークと企業の連

帯に多く依存している。そして全く明白に、このためには、企業の成員の総ての諸利害が、対等に取扱われることが、その確保の第一歩である。その為には働くものが経済的利害のみに限らず、あらゆる利害に関して、連合するごとく処遇されねばならない。経営と現場は機能的には区別されながら、しかも企業の窮極の責任と管理については、同一の立場にたたねばならない。従つて、企業内の最終的管理と責任の諸配置は、労働者側にうけいれられるべき、民主的なものである必要がある。更に、之に加えて、企業とその活動する経済的社会的環境は、できるだけ多くの人々に公正かつ合理的なものとすうけいれられねばならない。ところがブリテンの状況は、どうであろうか、生活の主要領域たる、居住、教育、保健について階級的な差等が存在し、その故に、労働者階級の間に、現存の全機構にたいする拒否が存することは明らかである。この拒否、大衆的不満は、結局は、企業組織に対する人々の否定的感覺を変化させる以外には解決の方途はないのではあるまいか。働らく人々を、賃銀はもちろん、利潤の所有者たらしめることと、窮極の責任と管理をかれらに付与することにより、部分的かつ変容された市場制度に関する肯定的な感情を、より多数の労働者階級の人々の間にひき起こすことが当面望まれるのである。これによって、外部からの資本や私的な持分保有者が、その企業から消滅する傾向が生じ、企業は内部的に一つの統一体となりうるであろう。以上が著者の考え方の大づかみなスケッチである。

## 五 生産組合の歴史と現状

### (一) ブリテンの現場労働者の生産組合 'cloth-cap'

#### co-op

ブリテンでは、労働者生産組合のイデオロギーは華やかな沿革をもつがその実態は、歴史の大道の路傍に咲く徒花に過ぎなかった。オークショットの言を引こう。「前世紀中葉の、キリスト教社会主義者の諸理想とごく最近の繁栄した資本家的企業をその労働者たちに譲りわたした、スピーデン・リュイスやエールンスト・ペーダー（およびダブリンの進歩的クエーカー、ビューリイ家一族）などの人々の活動力とを関係づけるのは、けっして非現実的ではない。キリスト教社会主義者たちは、疑いもなく、その証しを今日に残しているのである。……しかしクロポトキンについてのべたごとく、一般に分派の群や分岐する諸党派の雑多な陣列が存在することは、すでに論じきたった通りである。独立労働党、ギルド社会主義者、自由主義の伝統による同情的悲観論者、デストリビューテストおよび諸般のキリスト教社会主義者等々、それらは概して、資本家や官僚的社会主義者（ウェップ夫妻のごとき著者は指す）の主流のいずれよりも、はるかに魅惑的で、しかもその理想がずつとさわやかで活気に富んでいる。そこでその影響は誇張される危険がある。しかし、組織された労働者階級の巨大な砲列や集合した諸部隊、組織的資本家の対抗的要塞にくらべると、何といつてもそれら

#### 労働者生産組合について

は、階級戦の戦場の側面を担当する矮少なゲリラ部隊にすぎないし、歴史の大打進からはるか離れた馬の踏み跡のごとき狭小なものに止まる。さらに等しく重要なことは、一九世紀中葉から、ウェッジウッド・ベンの産業相任命の一九七四年まで、これらの声は、内閣のテーブルにとどかなかつたのである。一八八〇年代、それに類したものは、公正を期すために、民間にその供給を開放していた軍用長靴の生産のためのごく僅かな契約として、一握りの長靴と靴の生産協同組合の間に存したのみである。その他については、多彩な民主企業は、それらのための諸発言と同様、公的には無視されたのであつた」（同書第四章、五一ページ）

そこで、次に、生産協同組合の歴史的沿革の概略のスケッチを描くことにしよう。これは同書の第五、第六、第七章にわたり、フランスの生産協同組合、イタリアとスペインの協同組合を描いた諸章とともに、本書の中軸を形成している。しかしここではとりあえずブリテンの生産組合の現実的な状況を、説明するために、その限りにおいて対比的に、フランスの現状とその発展に触れたい。

独立の、民主的に所有され管理されている協同組合的な生産諸企業は、ブリテンにあつては、支持を得られる環境にも恵まれず、イデオロギー的にも傍らにおしやられてきた。記録は傷ましいものであるかまたは憂鬱な結果を示す。そこで、このような企業は経済的に失敗するか、または民主的性格の維持に失

敗した、とするウェッブ夫妻の評価がすでに述べたごとく一般に容認されてきたのである。

(13) 同書五二ページ。なおビアトリクス・ウェッブ『イギリス消費組合発達史論』(原、一一七ページおよび注9参照)

しかし、このような状況をくつがえす効果的な、経験の再審がおこなわれはじめた。簡単にその経過を辿ろう。ユートピア的なオーエン主義の実験と、多少ともインフォーマルな、しかし成功例であるタクシー業の組合、漁船組合類似のものを別として、注目すべき三つのそれぞれ異種の経験が存在する。第一は、旧来の「労働者の生産組合」および職人の組織する生産協同組合であつて、その総て又は殆んど総てが、第一次世界大戦までに創設された。ただ唯一の規模の大きな例外は、一九二〇年創立の短命に終った建築エギルド生産組合であり、また、小さな例外は両大戦間の時期に創設されたシュタフォードの製靴協同組合とワトフォード印刷工組合であつた。これらは、ウェッブ夫妻が主に言及した諸協同生産組合企業で、その一ダースは、多少とも繁栄した姿で残っている。これらを著者は、鳥打帽労働者協同組合「clo the cap coop」と名づける。

第二は、産業的共同所有権確立運動(The Industrial Common Ownership Movement, ICOM)と結びついた諸協同経営で、総てではないが、その殆んどが、スコット・ペーダーやビューリィ・キャフェュのごとくより民主的な構成を採用した、以前に資本家的企業として事業を始めた諸会社であり、主に第二

次大戦後の現象である。同じ性格のものをも含めて、一九七〇年代約一ダースが存在している。

第三のものは、資本家の事業の失敗による破産から、救われ、もしくは自力で建て直した経歴の諸企業で、そのもつとも有名なものは、二つの残存する「ウェッジウッド・ペン協同組合」である。これには、カークビー機械製造協同組合、メリデン・モーターサイクル協同組合をはじめとして、いくつかが、一七九〇年代にも残存する。

以上の三類型について順を追つて以下やや詳細に述べよう。

協同組合に、最初の権利を与えた立法たる一八五二年の産業及び節儉組合法の後、一九七七年にいたる一二五年間を大観すると、旧来のブリテンの生産協同組合の発展経過は、二つの主要な局面(Phase)にわかたれる。最初の局相は、一八五〇年以前、初期のオーエン主義の起源にまで遡つて展開し、一八八〇年代初期の頃にばらばらに終結するものであり、野心的な(例えば現世救済、世界改革のごとき)目標、混乱した組織のモデルと具体的要請、多くの誤つた出発点そして極めて少数の限られた成功例によつて特色づけられる。この過程はすでにビアトリクス・ウェッブによりながら説述した。第二の局面が始まるまでに、多少の実験例が発展せしめられ、到達目標は思いきつて削減された。そして新しい企業がいくつか生ずる小爆発が起り、かなりの数が残存した。しかし、その適切な開花を確実にする力と機会は、一次大戦の生起に際会して消尽され、以後前述の



建築エギルドを除き、この種の新たな協同組合を開始するイニシアティブは発揮されなかった。だが、他方、驚異的な頑強さと残存の能力を示して、そのかなりの数が事業界に生き残ったのである。

余りに野心的な誤った出発のしかたを示す例として、一八四〇年代後期のリーズの救済組合(R・O・前掲、五四ページ)混乱した組織と準備訓練の不足による例を、ウェストエンド長靴製造組合(同、五五ページ)、経営の成功が、外部の持分主の多数の参加を招来しそのため事実上株式会社に転化した一八五四年のロッチデール綿織物生産組合(門戸開放と投票権制限の問題と、金融の問題が初期の生産協同組合の難問を形成した)があげられた。

そして製造と経営の技術を欠如したために、複雑な市場に適応できなかった、ニューカッスルの、アウスバン協同生産組合は、金属、機械工業および鉱山業の多様な諸部門の、一連の協同組合形態の企業の代表例であった。資本動員にさいしての株式会社と協同組合との能力の差違はコールの強調するところだが、生産協同組合にとっては、一八七〇年代の経験は、複雑な又は特殊に競争的な分野における、新たな大規模事業が、協同組合の利用可能な資金量をはるかに超過することを明白に示した。そして鉱業における協同企業の企画は、一八七〇年代以降記録されていない。金属加工業にあっては、むしろ対極たる極小規模に残存の目安がつけられるようになった。その例としてハウルバーハンブタン・プレートロック生産協同組合およびワ

#### 労働者生産組合について

ルサル・ロック組合があげられ特に後者は一九七〇年代まで残存する名譽をになっている。オークショットは、生産組合の第一の局面について「一八七〇年代末までに労働者の生産協同組合運動の第一局面は終結したが、数多い否定的な教訓が目立つ」と既に述べたことを総括した後で、「他の資料に照してみると、ロッチデール織物組合の背後の、労働者たちのイニシアティブは、特別の強調に値いすると思われる。労働側の参与(コミットメント)は、明らかに協同組合企業の成功の決定的(死活を左右する)成分なのである。しかし肝要な点は、恐らくもつとも良く否定的に明らかにされる。この参与(コミットメント)は、主要労働者群の外部からイニシアティブが発生して来る場合には、ほとんど達成され得ぬことを示している。それはキリスト教社会主義者の財政的貢献による冒険的企業の死亡率に明らかだった。全く反対に、フランスの職人たちが開始した、すぐれてよく似た諸企業は、まさに成功しているのである」。(前掲書二二八ページ参照)とのべている。

ところで第二の局面にうつろう。これは、より野心的でない諸企業の、めざましい成功とまでいえないが、「もちのよい」(G・D・H・コールの言)産業の極めてせまい部門への組合の集中によつて特徴づけられる。衣料、印刷業、および靴製造にその六〇%内外が集中し、他に建築、金属加工等があげられる。一八八〇年代と一八九〇年代は、この種の生産協同組合の発展の年代で、一八八五年以後がそうであった。さて、デレク・

# 労働者生産組合について

ジョーンズのごとき最近の論者によるとロッチデール開拓者は、消費、生産のいずれの協同組合をも等しく企画し、協同組合運動は、一八八〇年代まで、両者に公平な発展の方策をとってきたとされている。この状態は一八八八年のディウスベリーの協同組合大会まで公式に維持されてきた。しかし一八七三年、卸売組合が消費組合の連合体として自前で、生産分野に参入する方針が定められ、運動方向は、実質的に分裂したのであった。ここに至り生産組合は、なかば自主的に、協同生産組合連盟 (Co-operative Production Federation C.P.F.) を創設し、労働者的な生産組合の効果的な連合体が形成された。一八八二年のことであった。

(14) 同書六〇ページ参照。消費組合優位の確立と生産組合大拡張の前提の形成と競合を示す。

オークショットはこれらを鳥打帽協同組合 (cloth-cap co-op.) と一括しているが、その特色を簡単に述べると、一八八〇年代から一八九〇年代に、急激にその数を増し、特定の生産分野にその分布が限られ、零細規模ではあるが驚くべき持久力を示している運動である。そしてその核心に、労働者階級の、現場の労働者の性格、これを著者は、実際に自分の手で働くクローズ・キャップ (ハンチング) 的性格に対する信任状と形容しているが、労働者たちの、かたくななまでの仲間意識 (六四ページ) がそこに存在しているのである。

〔第一表〕一八八一年—一九七三年、イングランドとウェール

ズの生産協同組合の推移 (オークショット前掲書より作成)

ケン・コート『ブリテンの協同組合』より (五九ページ)	デレク・ジョーンズの推定より補う (六五ページ)	
	より補う (六五ページ)	推定
一八八一年	一三	一一二
一八八五年	二七	七一
一八九〇年	七四	六四
一八九〇年	一三	五〇
一八九四年	一〇八	四四
一八九五年	一〇三	三七
一八九七年	一二	二六
一九〇〇年	一〇五	一六
一九〇三年	一二二	

ところで問題は、これらの生産協同組合の社会的性格である。具体例を若干挙げよう (第二表参照)。一八八一年に創立された、ノーザムプタンシャー生産組合は、既におこなわれていた賃率表にたいする労働者たちの不満を、その創立の動機とし、軍用長靴の政府発注に、経営を支えられる幸運に恵まれて発足した。しかしポッターは『消費組合発達史論』の付録の生産組合の分類の、事実上親方の使傭する、自治をおこなう組合に入れている。これはウェップ夫妻の「墮落」の第二の種類、資本家の会社への転形であり、一八八六年近隣のフィネドンからこの協同組合に雇われていた賃労働者たちは、独立して、フィネドン生産組合を創始した。同じく一八八六年創業の、衡平靴組合は、協同卸売組合所属の労働者たちの罷業から生じたも

のであるがこれについては既にのべた。

ワルサル・ロックス協同組合もストライキの結果生じた。しかし、この卸売組合は、公正にも、その設立を認め、若干の援助と市場を与えたのであった。翌一八八七年創立の、レスター印刷協同組合は、労働組合と消費組合のイニシアティブから生じ、「協同組合運動家と労働組合が、緊密な連合を形成しうる最良の方式を、経営で両者が平等な権利をもつ生産協同組合の創設」(同六一ページ)にもとめるものであった。しかしこの試ろみは下からの産業民主制の真正の例証ではなく、むしろ、地方的な、国民的企業カモンウィール・エンタープライズ(労働者組織に所有され管理される故に民主的とされる企業)の型に入るもので、選出理事のなかの労働者の割合はごく低かった(例えば九人中、一乃至三人)。一八八八年創立の、レスター近傍のケタリング書籍および靴、生産組合と、一八九三年の同じく衣料生産組合はいずれも、ケタリングの小売消費組合ストア(一八六六年創出)の一八八〇年代の繁栄を基礎として、レスター衡平組合、印刷組合の成功に刺激、鼓舞されて生じた。協同による創業資本の獲得と経営方式に関する忠告は、消費組合により与えられ、新企業は、製品の安定した市場を、消費組合の商圏の中に見出した。これら諸組合は、かくのごとく、生産開始の瞬間から二世代にわたり、ケタリング小売消費組合に依拠した。地味な成功を享受したが、にも拘わらず、最初から管理は、確固として労働者の手にあり、真実の民主的性格をそなえた協同生産

#### 労働者生産組合について

組合として、ビアトリス・ウェップの前掲書の附表の中の第一類に分類される、数少ない企業となっている。以上具体例としてあげた、一八八〇年代から一八九〇年代にいたる半ダースの生産協同組合の起源の敘述から、明らかなのは、創設のイニシアティブが、働らく人々もしくは、労働者組合から直接来ていることで、この現場労働者の性格は、既成の労働者階級の市場(消費協同組合の供給圏や労働組合の註文)への大幅な依存と創業に必要な資本のほぼ総額を、その拠出に仰いだことによっても明らかである。しかしこのクローズキップの性格を過大に評価して、社会の革命や世界の矯正や、反体制に結びつけてはならない。それはむしろ資本家体制との共存あるいは適応であり、現実には些細な勢力にすぎなかった。だが新しい協同組合の真実の労働者の性格は、それが制限的な故に重要とされるのであって、中産階級的でなく専門的技術的でもなく、したがって、「現場の人間以外を経営委員会に含まない」(メイヴィス・カークハム『大ブリテンの産業生産協同組合、三つの事例研究』一九七一年)故に特徴的なのである。それは自己の手を使用する労働者階級下層の、そうしない特殊な中産階級的労働者にたいする不信を反映している。この社会的性格が「鳥打帽(ハンチング)労働者」現場労働者の協同組合」の特質である。しかしこの性格は大きな制限でもあり、不可避的に、狭い視野と成長の限定を伴った。フランスの二次大戦後の経験は全く同様の例を与える。二〇世紀初頭以来の、イングランドとウェールズのこの種の生産

## 労働者生産組合について

二二二

協同組合の漸次的衰退はこれを証明する（「第一表」参照）。しかしこの衰退の緩慢さ、逆にいうと、頑強ともいふべき残存率は驚くべきもので、一九一四年当時の小会社企業と比較すると「現場労働者の生産組合」の残存率ははるかに高いのである（前掲書六六ページ、五・三表参照）。しかし、一九七三年現在のこの「現場労働者の生産組合」は高い残存率（長命度）を示すが、その発展に力強さが欠けていることは否定出来ない。そのほとんどは、一九一三年以前の創業であり衣料品、履物製品、及び印刷のごとき、市場が、消費組合運動の支配下にある生産部門に偏在し、労働組合が勢力をもつところに集中している。G・D・H・コールの言を借りるとそれらは、消費組合運動の「衛星」サテライトに過ぎない。そして、若干の発展は、一、二の組合で存在したが、一組合当り、平均一〇〇人、総数にしても千人の単位を超えない雇傭労働者を擁するに過ぎない。この頑強な生命力と規模の固定性、内容の停滞性はまた、管理と所有の組織的混乱とその増加傾向の結果でもあり、簡単にいうと、管理と所有の同一性は保証されていないのである。特徴として、内的ならびに外的な所有と管理の混合物であり、持分の保有者たる成員と持分なしの単なる、組合員でない労働者が混在し、外部からの参入者、同情者、退職者が組合組織の純粋さを欠如させている。さらに労働者の二〇世紀中葉以降の傾向たる週賃銀重視（半年毎・四半季当り配当の軽視）協同組合相互の労働問題におけるユニオン・ショップの役割（企業の独立性は守られるが、利害

の、現場と管理の間の分離もまた認められる、旧来の生産協同組合の労使慣行）が、これら鳥打帽的組合の足を引っぱり発展を停滞させている。

そこで結論的に概括すると、ウェット夫妻の鋭い批判にも拘わらず、はるかに野心的でない地道な活動を続け、適切な商業的成功を示す、労働者の支配と、所有権を有する、特異な協同組合運動の、動揺するがかなりの達成が、現実存続する残った組合として示される（第三表参照）。それらの構造は、不純で不完全とも言えるが、資本家的に容易に墮落することきものではないことを長期にわたり示してきた。しかし真にそれらを産業民主制的な勝利者とは認め難い。アルフレッド・マーシャルの評価を借りながら著者はいう。「労働者の組合は、きまつて管理と適切な専門家を欠き、その理事者の長期の献身と尽力にも拘わらず、高度の経営技術能力を補充し得なかった。だからそれらは、民主的な組織と最高の現場の技量の達成との結合する最良の経営組織の自主管理体の試金石をあたえられなかったのだ。まさにしっかりと攻撃力とよい守備をもつが、第一級のボーラー（投手）をもたないクリケットチームの記録のごとくに」（前掲七三ページ）。未完（一九八〇、一一、二七）

「第二表」一八八〇年から一八九〇年代開業の協同組合企業（前掲六一ページ参照）

創立年次	企業名	起源
一八八一	ノーザムブタンシャー	長靴、短靴、製造労働

生産組合(N・P・S) 者群

一八八六 ファイネドン生産組合 N・P・Sの冷遇され

た労働者たち

一八八六 衡平製靴組合 協同卸売組合の罷業者

たち

一八八七 レスター協同印刷組合 労組と協組のイニシア

ティブによる

一八八八 ケタリング書籍及び靴協 協同小売組合

同組合

一八九三 ケタリング衣料協同組合 資本家の差別待遇によ

る

〔第三表〕工業省発表、一九七三年残存の現場労働者の生産組

合の一〇年間生産額、雇傭者数

生産高(ポンド) 雇傭者数(人)

印刷部門

ブラックフライアーズ印刷(レスター) 不詳 不詳

プリストル プリンターズ 三六、〇〇〇 一五

ダービー プリンターズ 九一、〇〇〇 三六

ハル プリンターズ 三三、〇〇〇 七

ノッティンガム プリンターズ 七六、〇〇〇 二

ワトフォード プリンターズ 三九、〇〇〇 六

レスター プリンターズ 三七、〇〇〇 四

長靴・短靴製造部門

労働者生産組合について

アバロン フットウェア

(ケタリング)

二九

エキイティ シューズ(レスター)

一六

NPS シューズ(ワラストン)

六

セント・クリスピン フットウェア

(ウェリングスバラ)

八

衣料部門

アイデアル クロージュア

(ウェリングスバラ)

六三

クイーン エリーナ(ケタリング)

一六

サンレイ テクスタイルス(コルヴィル)

七

その他

レスター キャリッジ ビルダース

一七

ワルサル ロックス

一七